文化庁委託

日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業

CINGA 日本語学習支援者に対する
研修カリキュラム開発事業
教材

事業実施期間：　２０18年7月3日～２０２０年3月１９日

特定非営利活動法人　国際活動市民中心

目次

研修構造図 3

教材１　研修の枠組みを示した教材 4

1-1　研修各回の流れ 7

教材２　研修使用教材の例 13

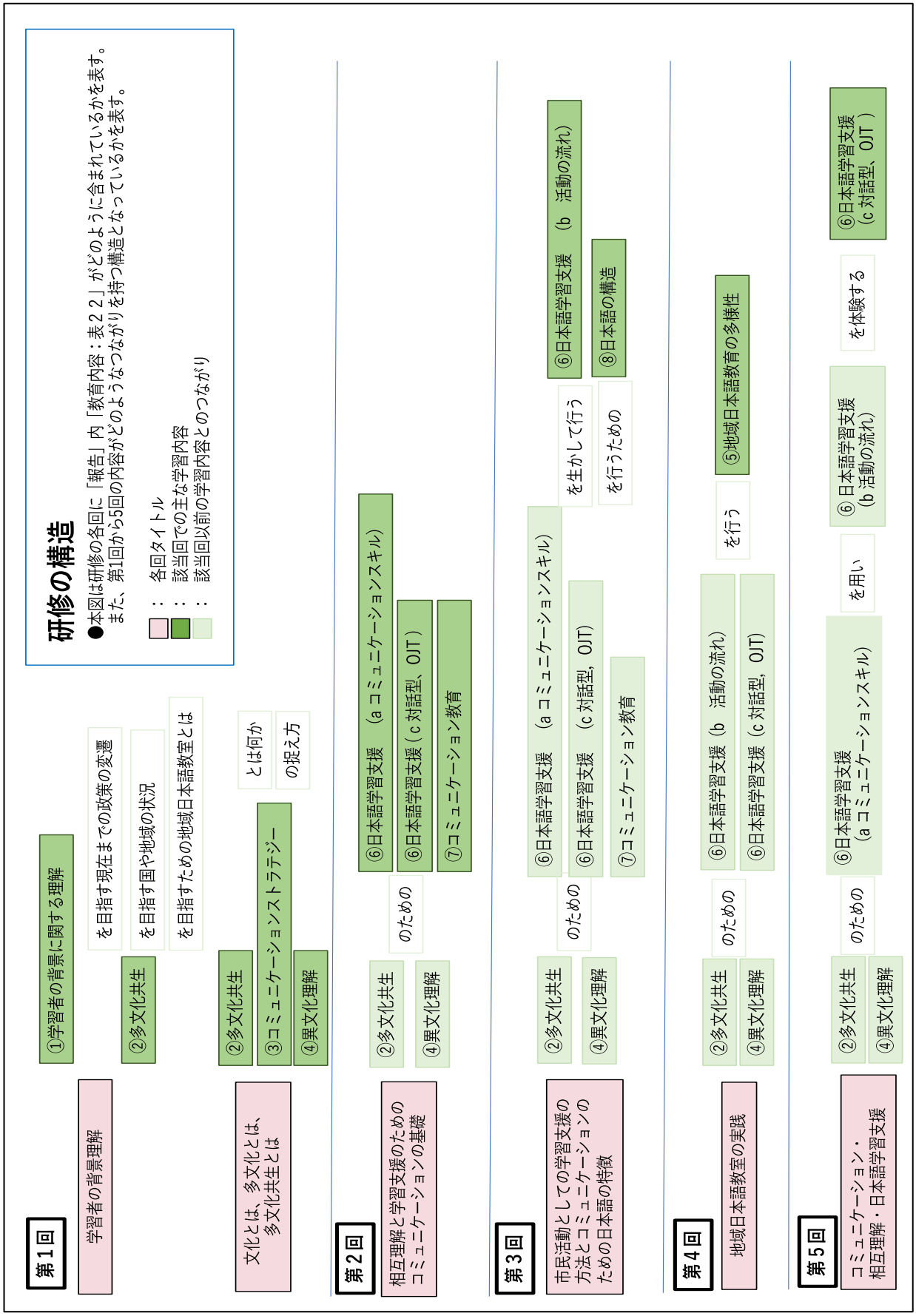
2-1　学習項目シート 15

2-2　学習項目カード 16

2-3 ふりかえりシート 18

2-4 研修各回使用教材例 20

研修構造図


研修の構造
●本図は研修の各回に「報告」内「教育内容：表２２」がどのように含まれているかを表す。
また、第1回から5回の内容がどのようなつながりを持つ構造となっているかを表す。
：各回タイトル
：該当回での主な学習内容
：該当回以前の学習内容とのつながり
第１回
学習者の背景理解
①学習者の背景に関する理解
を目指す現在までの政策の変遷
②多文化共生
を目指す国や地域の状況
を目指すための地域日本語教室とは
文化とは、多文化とは、多文化共生とは
②多文化共生
③コミュニケーションストラテジー
とは何か
④異文化理解
の捉え方
第２回
相互理解と学習支援のためのコミュニケーションの基礎
⑥日本語学習支援　（a コミュニケーションスキル）
のための
②多文化共生
⑥日本語学習支援（c 対話型、OJT）
④異文化理解
⑦コミュニケーション教育
第３回
市民活動としての学習支援の方法とコミュニケーションのための日本語の特徴
⑥日本語学習支援　（a コミュニケーションスキル）
を生かして行う
⑥日本語学習支援　（b　活動の流れ）
のための
②多文化共生
⑥日本語学習支援　（c 対話型，OJT）
を行うための
⑧日本語の構造
④異文化理解
⑦コミュニケーション教育
第４回
地域日本語教室の実践
⑥日本語学習支援（b　活動の流れ）
を行う
⑤地域日本語教育の多様性
のための
②多文化共生
⑥日本語学習支援（c 対話型，OJT）
④異文化理解
第５回
コミュニケーション・相互理解・日本語学習支援
⑥日本語学習支援（a コミュニケーションスキル）
を用い
⑥ 日本語学習支援（b 活動の流れ）
のための
②多文化共生
を体験する
④異文化理解
⑥日本語学習支援（c 対話型、OJT ）

教材１　研修の枠組みを示した教材

教材の使用方法

本教材は、CINGA 日本語学習支援者に対する研修カリキュラム開発事業報告書に付随するものです。報告書と合わせてご覧ください。本教材は今後日本語学習支援者研修を実施する地域の担当者やコーディネーターなどが、研修の設計を学ぶための教材です。以下に、まず各教材の内容と使用する際の留意点を述べます。本教材をご使用になる方は、まずこちらをお読みください。

●教材 1-1　「研修各回の流れ」 p.7

本報告書に掲載している各回の研修は、実際に２年間の事業で取り組んだ内容・方法をまとめたものです。２年間の取り組みを通して徐々に洗練されていったものの集大成と言えます。各回の研修の流れを見るときの留意点として、以下の点をあげたいと思います。

1）各回の目的をまず確認した上で、個別の活動が目的達成のためにどのように行われているかを把握すること
　それぞれの活動は目的達成のためにデザインされています。各研修を各地で援用する場合は、目的と地域特性に照らして代替案を検討する必要があります。活動の表面的な流れで判断しないことが重要です。

2）1 回の研修の流れだけでなく、5 回分全体の流れにも目を向けること
　地域における学習支援者研修では、時として、全体の設計が十分に考慮されていないことがあります。地域によっては、参加者がばらつくので 1 回完結型でと考えるところもあるでしょう。1 回で内容が完結することは大事ですが、それと同時に、1 回 1 回の積み重ねが、全体として何を目指すのかという大きな流れも忘れてはなりません。

3）各回のはじめと終わりの活動に十分に目配りをしてその意味を考えること
　各会の研修を援用する場合、目につくのはいわゆる「ボディ」の部分、つまり、研修のメインの活動（に見える）部分です。しかしながら、私たちの研修は、ボディ以外の部分、研修開始時と終了時の取り組みにも重要な学びの契機として「ふりかえり」の機会を盛り込んでいます。この「ふりかえり」を削除してしまうと、これらの研修の効果は半減し、意味はほとんどなくなります。

本教材は、各回研修を「時間」「内容」「活動形式」「講師の意図」「ARCS モデルによる分析」という各項目で説明しています。

＜時間＞

当該の研修で何に何分費やしているかの目安です。実際には参加者の状況によって弾力的に行います。時間配分を見るとわかるとおり、一つ一つの活動を比較的短く区切っています。これは意図的に行なっているものです。人の集中力はそんなに長時間続くものではありません。また、一つ一つの活動の時間を短くすることで、短時間で最大限の集中力を引き出すという効果もあります。よくある「エラい先生の 90 分の講義」みたいなものは、学習効果としては高くありません（学んだ「つもり」になりますが、実際には学習があまり起きません）。また、参加者が「講義を長時間聞きたい」というかもしれませんが、そういうタイプの参加者は、対話的活動が中心となる日本語学習支援には向いていません。時間と労力（とお金）を有効に使い、研修を通して地域の支援活動の質を高めるには、長時間の講義を行うような研修は、避けることが望ましいと思います。さまざまなオトナの事情で、どうしても講義が必要な場合は、zoom 等でしゃべっているものを録画して YouTube 等にアップし、参加者が都合の良い時に見ておくように

指示すればよいと思います（旅費交通費も節約できますし経年で使えます）。

＜内容＞

大項目と中項目がありますが、大項目はどこで研修を実施してもあまり変わらない内容だと捉えるとよいと思います。一方で、中項目は具体化されたものですので、地域の実情に応じて入れ替え可能な部分だと考えて問題ありません。

＜活動形式＞

全体的な傾向としては、最初と最後に講義が入り、真ん中がグループワーク等の活動というパターンになっています。最初に講義を入れるのは、その回の研修で何をやるのかを参加者が十分に理解して、各自が見通しを持ってその後の活動に取り組むことができるようにするためです。最後の講義は、その日の内容を講師が専門的な見地からわかりやすくまとめて整理するために入れています。この最後の講義部分は、カタカナ語で「ラップアップ 」と言うこともできます。今日の講座でやったことを参加者のみなさんが持ち帰ってさらに学びを深めていくために「お土産としてエッセンスを包む」という意味があります。ですから、最後の講義で新たな知識がたくさん出てくるのは適切ではない場合が多いと思います。各自がまとめる手助けです。グループワークの人数などは、研修実施地の環境に左右されると思いますが、全員の関与を高めるためには、3 人から 5 人ぐらいが理想的だと思います。

活動形式に応じて、場の設定、机や椅子の配置を変えることも重要です。講義の時は机も椅子も前向きで体も正面を向いていること。グループワークやディスカッションの時には、机も椅子もグループ型（島型）にしてお互いに正対できるような工夫が必要です。ちょっとしたことですが、学習効果や議論の深まりに大きな影響を与えます。会場の制約によって机や椅子を動かすのに時間がかかる場合は、休憩時間をうまくつかって配置換えをする、会場を二つの場所に区切って、講義型とワーク型で移動するなどで対応することもできると思います。

グループワークやディスカッションを行う際には、やっていることを文字にして記録することも重要です。研修全体を通してふりかえりを行う際にも貴重なリソースになります。

＜講師の意図＞

ここでは、本研修に携わった講師が、どのような意図を持ってこの活動を行なったのかについて記載しています。このとおりに進める場合もあるでしょうし、同じ活動でも意図が異なること、同じ意図でも活動が異なることなど、各地域の実情に応じて考えていく必要があります。

＜ARCS モデルによる分析＞

インストラクショナル・デザインという専門分野があります。学びの質を上げるためにどのような仕掛けを考えればよいかということについて、実証的に研究している学問分野です。ARCS モデルとは、そのインストラクショナル・デザインの考え方の一つで、人々の学びの意欲を高め、学習の質を上げる際に必要となる要素をまとめたものです。

ARCS とは Attention（注意）、Relevance（関係性）、Confidence（自信）、Satisfaction（満足感）それぞれの頭文字から名付けられています。

これら 4 つの要素がさらに下位分類されて以下のようになっています。

A：Attention（注意）…おもしろそうだと思う仕掛け

A-1 知覚的喚起（Perceptual Arousal）楽しそうだと思える

A-2 探究心の喚起（Inquiry Arousal）「なぜ」や好奇心を喚起する

A-3 変化性（Variability）全体像を示す、マンネリを避ける

R：Relevance（関連性）…やりがいがありそうだと思う仕掛け

R-1 親しみやすさ（Familiarity）得意分野や興味関心に近い

R-2 目的指向性（Goal Orientation）積極的取り組み促進、目標達成の意味を明示

R-3 動機との一致（Motive Matching）得意でやりやすい方法

C：Confidence（自信）…やればできそうだと思う仕掛け

C-1 学習要求（Learning Requirement）ゴールの明確化

C-2 成功の機会（Success Opportunities）進歩を実感、練習の場

C-3 コントロールの個人化（Personal Control）自分でコントロール

S：Satisfaction（満足感）…やってよかったと思う仕掛け

S-1 自然な結果（Natural Consequences）やったことの意味を感じられる

S-2 肯定的な結果（Positive Consequences）ほめられる

S-3 公平さ（Equity）正当に評価される

今回の教材では、各回の各活動をこの ARCS モデルで分析・分類してみました。私たちも初めての試みで、この分析・分類の妥当性は引き続き検証される必要がありますが、参考になればと思い掲載しています。インストラクショナル・デザインについては、鈴木（2016）などを参考にするとよいと思います。

鈴木克明監修（2016）『インストラクショナルデザインの道具箱 101』北大路書房

1-1　研修各回の流れ

第1回「学習者の背景理解」「文化とは、多文化とは、多文化共生とは」

目的	1. 研修のねらいを理解する 2. 学習者の背景についてデータを元にして理解する 3. 文化について体験を通して考える

時間	内容(大項目)	内容(中項目)	活動形式	講師の意図	ARCSモデルによる分析的視点
0	イントロダクション	研修実施団体, 研修担当者紹介	講義	講座の目的や全体像をつかみ, 講座に対する期待度や動機付けを高める 以後の研修の円滑な実施を図る	受講者に興味を持ってもらう(A-1), 目的の明確化による探究心の向上や学習動機の向上(A-2, A-3)
5		研修目的, 研修内容, 研修方法, スケジュール等説明	講義		
10		研修の背景説明(システム図等)	講義		
15	アイスブレイク	自己紹介と自身の活動紹介	グループワーク	対話的なアイスブレイクを実施することで, アイスブレイクの機能と対話的活動の体験という二つの意味を持たせる	活動に対する心理的抵抗感の軽減による学習動機の向上(A-1)
27	目標設定	資質・能力の確認	グループワーク	目標を明確化することで一人一人の講座を通した学びの質を高める	目的の明確化による学習動機の向上(A-3), ゴールの明確化による「できそうだ」という見通しの提供(C-1)
37	学習者の背景理解	日本全体の状況(訪日外客数, 在留外国人数, 在留資格別外国人数, 日本語学習者数等)	クイズ＆講義	日本語学習支援の背景にある社会的状況を理解することで, 何のために支援活動を行うのかという大きな視点を持ってもらう	クイズによる「考える」時間の確保(A-3), 自分なりに答えを考えることに積極的に取り組むきっかけ(R-2), ゴールイメージの明確化(C-1)
50		実施地域の状況(実施地域の施策, 外国人の日本語学習の実態等)	講師と実施地域担当者の対談	港区の状況を理解することで, 何のためにどのような支援活動を行うのかという具体的な視点を持ってもらう	
65		教室紹介	動画視聴		
70	確認	質疑応答			疑問や興味関心に答えることで学んだことを構造化する(R-1)
	休憩				
80	文化に関するワークショップ	レヌカの学び	グループワーク	文化理解について考える前提として、人間は多様な文化を持ち、移動を通してその多様性は拡大していることに気づく	事例に触れる, 考えるという経験を通して文化理解に対する具体性を高める(A-1, A-2, R-1, R-2)
120	ふりかえり1	ワークショップでやったことを確認	個人作業	個人での省察、協働での省察を通して、レヌカの学びは参加者一人ひとりにも起こっている学びであること、文化理解は他文化理解にとどまらず、まずは自文化の多様性への理解から始まること、にきづくこと	自分なりの学びを確かめる機会の提供(C-2)
135		何を学んだか意見交換	グループワーク		
150	まとめ	文化とは何か	講義	文化とは、多文化共生とはなど、講座の内容を理論的に整理することで, 体験を通した学びの定着を図る	体験的に学んだことの重要性の確認と理解(S-2)
165	ふりかえり2	アンケート記入等	個人作業	自分自身が取り組んだことをふりかえることで学びの成果と課題を明確化し, 各自の学びの質を高める	自分ができることとできないことの明確化(C-1)

第2回 「相互理解と学習支援のためのコミュニケーションの基礎」 前半

目的	1. コミュニケーションスキルについて理解し実践できるようになる(やさしい日本語)

時間	内容(大項目)	内容(中項目)	活動形式	講師の意図	ARCSモデルによる分析的視点
0	イントロダクション	前回のキーワードや資料等の再確認によるふりかえり	個人作業	既有知識を活性化したり, 研修内容の積み重ねと連続性の意識を高めたりすることで, 研修の質の向上を図る	学んだことの確認・チェック(S-1, S-2)
10		今回の講座の目的, 内容, 方法の確認	講義	講座の目的や全体像をつかみ, 講座に対する期待度や動機付けを高める	受講者に興味を持ってもらう(A-1), 目的の明確化による探究心の向上や学習動機の向上(A-2, A-3)
15		レディネスのチェック(自分の話し方についてのふりかえり	講義	自分の日常の話し方に目を向けるとともに、受講者それぞれの話し方があることに目を向ける	自分ができることを意識化する(R-1, C-1)
20	やさしい日本語に関する理解(理論面)	やさしい日本語の概要がわかる映像紹介	ビデオ視聴	やさしい日本語の概要を把握	やさしい日本語の具体的なイメージができるようにする(A-2, R-1)
24		やさしい日本語に関する基本的な知識(定義, 使用場面, 書換例等の提示)	講義	やさしい日本語の様々な使用場面を知る	
30	やさしい日本語に関する理解(実践面)	日本語学習者のスピーチビデオを視聴	ビデオ視聴	やさしい日本語の実際を知る	
38		ビデオの内容をもとに観点を絞って意見交換(文の長さ, わかりやすさ等)	グループワーク	やさしい日本語のルール説明の前段階として、自らが感じた印象と気づきを言語化し、グループワークで気づきをシェアする	課題を自分ごととして積極的に取り組む(R-2), 自分のやりやすい方法を見つける(R-3), 自分の気づきを確かめる(C-2)
46		やさしい日本語書き換えワーク	グループワーク	やさしい日本語のルールを知る	自分ができることを意識化する(R-1, C-1)
60		情報伝達の演習(災害情報をわかりやすく伝える練習)	ペアワーク	・生活に密着した情報を、目の前にいる「個」(ここではビデオの日本語学習者)に合わせたやさしい日本語にするにはどうするかを考える ・生活密着情報の教材として市の数種の広報を使用することで、情報源の紹介機会とする	課題を自分ごととして積極的に取り組む(R-2), 自分のやりやすい方法を見つける(R-3), 身につけたことを使う機会を確保する(S-1)
70	まとめ	やさしい日本語とは何か	講義	講座の内容を整理し、相互理解のためのやさしい日本語についての学びの定着を高める	体験的に学んだことの重要性の確認と理解(S-2)
	ふりかえり	アンケート記入等	個人作業	自分自身が取り組んだことをふりかえることで学びの成果と課題を明確化し, 各自の学びの質を高める	自分ができることとできないことの明確化(C-1)

ARCSモデル	注意(Attention)	自信(Confidence)
	A-1 知覚的喚起 (Perceptual Arousal) A-2 探究心の喚起 (Inquiary Arousal) A-3 変化性 (Variability)	C-1 学習要求 (Learning Requirement) C-2 成功の機会 (Success Opportunities) C-3 コントロールの個人化 (Personal Control)
	関連性(Relevance)	満足感(Satisfaction)
	R-1 親しみやすさ(Familiarity) R-2 目的指向性 (Goal Orientation) R-3 動機との一致 (Motive Matching)	S-1 自然な結果 (Natural Consequences) S-2 肯定的な結果 (Positive Consequences) S-3 公平さ(Equity)

第2回「相互理解と学習支援のためのコミュニケーションの基礎」後半

目的	1. 日本語学習支援の考え方について理解し実践できるようになる 2. コミュニケーション教育について理解する

時間	内容(大項目)	内容(中項目)	活動形式	講師の意図	ARCSモデルによる分析的視点
0	イントロダクション	今回の講座の目的, 内容, 方法の確認	講義	講座の目的や全体像をつかみ, 講座に対する期待度や動機付けを高める	受講者に興味を持ってもらう(A-1), 目的の明確化による探究心の向上や学習動機の向上(A-2, A-3)
5	聞くことに関する理解	「聞く」ワークショップ, 3種類の聞き方について体験した上で話し合う	グループワーク, ペアワーク	話しやすい環境とはどんなものか, 支援者が体験的に理解する	課題を自分ごととして積極的に取り組む(R-2), 自分のやりやすい方法を見つける(R-3), 自分の気づきを確かめる(C-2)
40		ワークショップふりかえり(録音したものの確認と感想共有)	グループワーク	聞くことによるコミュニケーションの活性化の具体例を知る	聞く活動の具体的なイメージができるようにする(A-2, R-1), 聞くことに実際に取り組む(S-1), 自分なりの学びを確かめる機会の提供(C-1)
55	コミュニケーション教育に関する理解	聞くことと「同化」「共生」の関係について知る	講義	共生社会実現のために聞くことが果たす役割を考える	自分が果たす役割や解決できる課題を自分ごととしてとらえる(R-2)
70	まとめ	対話を通して日本語学習支援の考え方について確認する	講義	講座の内容を理論的に整理することで, 体験を通した学びの定着を図る	体験的に学んだことの重要性の確認と理解(S-2)
75	ふりかえり	アンケート記入等	個人作業	自分自身が取り組んだことをふりかえることで学びの成果と課題を明確化し, 各自の学びの質を高める	自分ができることとできないことの明確化(C-1)

ARCSモデル	注意(Attention)	自信(Confidence)
	A-1 知覚的喚起 (Perceptual Arousal) A-2 探究心の喚起 (Inquiary Arousal) A-3 変化性 (Variability)	C-1 学習要求 (Learning Requirement) C-2 成功の機会 (Success Opportunities) C-3 コントロールの個人化 (Personal Control)
	関連性(Relevance)	満足感(Satisfaction)
	R-1 親しみやすさ(Familiarity) R-2 目的指向性 (Goal Orientation) R-3 動機との一致 (Motive Matching)	S-1 自然な結果 (Natural Consequences) S-2 肯定的な結果 (Positive Consequences) S-3 公平さ(Equity)

第3回「市民活動としての学習支援の方法とコミュニケーションのための日本語の特徴」

目的	1. 日本語学習支援における対話的活動について理解する 2. 対話的活動を通した日本語使用について理解し実践できるようになる

時間	内容(大項目)	内容(中項目)	活動形式	講師の意図	ARCSモデルによる分析的視点
0	イントロダクション	前回のキーワードや資料等の再確認によるふりかえり	個人作業	既有知識を活性化したり, 研修内容の積み重ねと連続性の意識を高めたりすることで, 研修の質の向上を図る	学んだことの確認・チェック(S-1, S-2)
10		今回の講座の目的, 内容, 方法の確認	講義	講座の目的や全体像をつかみ, 講座に対する期待度や動機付けを高める	受講者に興味を持ってもらう(A-1), 目的の明確化による探究心の向上や学習動機の向上(A-2, A-3)
15	対話について理解する	共通点探しワーク体験	グループワーク	・日本語の力が限られた学習者を相手にした時でも対話を活性化するアクティビティの体験をし、対話を活性化する方法をイメージできるようにする ・市民活動としての日本語学習支援の核が「対話」であり、対話を通して相互理解・文化理解が深まり、 ともに学び合うことができること、そして そしてそれが、ともに社会をつくっていく出発点となることが意識できるようにする ・活動の体験を、在住外国人の状況、「文化」「多文化共生」「やさしい日本語」「聴く・待つ」と結び付けて考えられるようにする	支援活動の具体的なイメージができるようにする(A-2, R-1), ワークの内容を実践に役立てることを考える(S-1, S-2)
35		ワーク体験の発表	グループワーク		自分なりの学びを確かめる機会の提供(C-1)
50		ワーク体験のふりかえりとディスカッション(ワークで使いやすい日本語, ワークの効果)	グループワーク		自分ができることを意識化する(R-1, C-1)
65		対話についての理解(対話理論等の説明, 実践事例の紹介)	講義		自分が果たす役割や解決できる課題を自分ごととしてとらえる(R-2)
80		体験したワークの実践への応用を考える	グループワーク		学んだことが実践に役立つことを感じる(R-1), 身につけたことを生かすことを考える(S-1, S-2)
95	休憩				
105	対話的活動実践のための具体的取り組みの検討	対話的活動にふさわしいトピックについて(言語的側面と文化的側面)	グループワーク	・さまざまなトピックで、対話を活性化する方法をイメージできるようにする ・対話を活性化するリソース(教材)の例にふれ、イメージできるようにする ・対話を広げたり深めたりするための、コツ、留意点について意識できるようにする。	支援活動の具体的なイメージができるようにする(A-2, R-1)
115		対話的活動に使いやすい素材, 教材	講義		
130		対話的活動の具体的な進め方	講義, ペアワーク, グループワーク		
145		対話的活動の応用(話を広げていく方法)	ペアワーク		学んだことが実践に役立つことを感じる(R-1), 身につけたことを生かすことを考える(S-1, S-2)
160	まとめ	日本語教室のゴール, 対話的活動と日本語・文化について	講義	講座の内容を理論的に整理することで, 体験を通した学びの定着を図る	体験的に学んだことの重要性の確認と理解(S-2)
170	ふりかえり	アンケート記入等	個人作業	自分自身が取り組んだことをふりかえることで学びの成果と課題を明確化し, 各自の学びの質を高める	自分ができることとできないことの明確化(C-1)

第4回「相互理解を深めるための地域日本語教室の実践」

目的	1. 地域日本語教室の多様性について理解する 2. 地域日本語教室の実践について理解する 3. 日本語学習支援活動の実践ができるようになる

時間	内容(大項目)	内容(中項目)	活動形式	講師の意図	ARCSモデルによる分析的視点
0	イントロダクション	前回のキーワードや資料等の再確認によるふりかえり	個人作業	既有知識を活性化したり，研修内容の積み重ねと連続性の意識を高めたりすることで，研修の質の向上を図る	学んだことの確認・チェック(S-1, S-2)
10		今回の講座の目的，内容，方法の確認	講義	講座の目的や全体像をつかみ，講座に対する期待度や動機付けを高める	受講者に興味を持ってもらう(A-1)，目的の明確化による探究心の向上や学習動機の向上(A-2, A-3)
15	学習者について理解する	事例団体概要紹介	講義	「教える-教わる」の関係ではなく、「相互理解と文化理解」を目指した団体の具体的な活動の様子、参加する外国人(学習者)の生の声を知り、地域日本語教室の活動についてイメージがもてるようになる 参加者皆が、楽しく対等な立場で活動に関わる様子を知り、地域日本語教室の活動参加へのモーチベーションを高める	支援活動の具体的なイメージができるようにする(A-2, R-1)
25		学習者インタビュー視聴	ビデオ視聴		
35		視聴の感想ディスカッション，共有，講師コメント	グループワーク		自分なりの学びを確かめる機会の提供(C-1)
50		支援活動視聴	ビデオ視聴		支援活動の具体的なイメージができるようにする(A-2, R-1)
60		視聴の感想ディスカッション，共有，講師コメント	グループワーク		自分なりの学びを確かめる機会の提供(C-1)
75	休憩				
85	日本語学習支援の実践活動体験	外国人協力者との「共通点探し」ワーク	グループワーク	講座受講者同士で経験した(対話を活性化する)活動を、外国人協力者と共に体験することにより、活動を進めるために必要なやりとりや配慮など、新たな気付きを得る	課題を自分ごととして積極的に取り組む(R-2)，自分のやりやすい方法を見つける(R-3)，自分の気づきを確かめる(C-2)，目標達成の実感を得る(S-1, S-2)
110		ワークのふりかえり	グループワーク		
120		外国人協力者との「一文字書道」ワーク	グループワーク	これまで学んだ「聴く・待つ」「やさしい日本語」「対話」を意識しながら、外国人協力者と共に新たな活動を行いながら、日本語学習支援についての理解を深める 「教える-教わる」ではなく、「相互理解と文化理解」を目指した活動の面白さや楽しさを実感することで、活動参加へのモーチベーションを高める	効果的な活動をわかりやすく示す(A-2)，活動を具体的にイメージし積極的に取り組めるようにする(R-1, R-2)，活動のゴールをわかりやすく示すことに触れる(C-1)
140		「一文字書道」作品閲覧	ギャラリーウォーク	参加者一人一人の様々な想いにふれ、それをきっかけに対等な立場で対話を展開させ、日本語学習支援の活動について理解を深める	全体で作品を見合うことで実践でもできそうだという達成感を得る(R-2)，他の人の作品を見ることで自分自身のできることや学んでいることを改めて意識化する(C-2)
150		ワークのふりかえり	グループワーク	共に活動をふりかえり、体験から得た気づきを言語化し、整理できる	体験的に学んだことの重要性の確認と理解(S-2)
160	まとめ	日本語学習とは，日本語学習における文化とは	講義	講座の内容を理論的に整理することで，体験を通した学びの定着を図る	体験的に学んだことの重要性の確認と理解(S-2)
170	ふりかえり	アンケート記入等	個人作業	自分自身が取り組んだことをふりかえることで学びの成果と課題を明確化し，各自の学びの質を高める	自分ができることとできないことの明確化(C-1)

第5回「コミュニケーション・相互理解・日本語学習支援と「多文化共生の地域づくり」」

目的	1. 講座で学んだことの全体像が整理できる 2. 今後の支援活動についての自分なりの見通しが持てる

時間	内容(大項目)	内容(中項目)	活動形式	講師の意図	ARCSモデルによる分析的視点
0	イントロダクション	前回のキーワードや資料等の再確認によるふりかえり	個人作業	既有知識を活性化したり，研修内容の積み重ねと連続性の意識を高めたりすることで，研修の質の向上を図る	学んだことの確認・チェック(S-1, S-2)
10		今回の講座の目的，内容，方法の確認	講義	講座の目的や全体像をつかみ，講座に対する期待度や動機付けを高める	受講者に興味を持ってもらう(A-1)，目的の明確化による探究心の向上や学習動機の向上(A-2, A-3)
15	教室見学のふりかえり	講座の課題として課されていた「地域の教室見学」のふりかえり	グループワーク	見学によって得たことを思い出し，次の講義のための既有知識の活性化を行う	課題を自分ごととして積極的に取り組む(R-2)，自分のやりやすい方法を見つける(R-3)，自分の気づきを確かめる(C-2)
30		地域の日本語教室のあり方について	講義	地域日本語教室のあるべき方向性について理解する	自分が果たす役割や解決できる課題を自分ごととしてとらえる(R-2)
35	講座全体のふりかえり	講座の各回のふりかえりシートの内容を踏まえ，講師が質問・疑問等に答える	講義	講座全体での疑問等に答えることで，学びの深まりを図る	疑問や興味関心に答えることで学んだことを構造化する(R-1)
55		各自が毎回記入したふりかえりシートをもとに個人で改めてふりかえり	個人作業	グループワークのための既有知識の活性化を行う	自分の気づきを確かめる(C-2)
60		グループでふりかえりの共有，目標達成や学んだことについてディスカッション	グループワーク	ふりかえりを共有することで，学びの経験を共有し，新たな視点や学び方に気づく	自分の気づきを確かめる(C-2)，目標達成の実感を得る(S-1, S-2)
80	休憩				
90	学習支援活動について考える	具体的な学習支援活動の案を考える	グループワーク	前4回の講義の内容も踏まえて学習支援活動の素材をつくることで，支援活動を自立的に行えるようにする	課題を自分ごととして積極的に取り組む(R-2)，自分のやりやすい方法を見つける(R-3)，自分の気づきを確かめる(C-2)，目標達成の実感を得る(S-1, S-2)
120		考えた活動の共有	ワールドカフェ	支援活動案を共有することで，支援の内容や方法についてより広く深く考えられるようにする	
150	まとめ	体験とふりかえりを通して学ぶとは	講義	講座の内容を理論的に整理することで，体験を通した学びの定着を図る	体験的に学んだことの重要性の確認と理解(S-2)
160	ふりかえり	アンケート記入等	個人作業	自分自身が取り組んだことをふりかえることで学びの成果と課題を明確化し，各自の学びの質を高める	自分ができることとできないことの明確化(C-1)
175	クロージング	今後の活動に関する情報提供，あいさつ			ひとまとまりの研修を終えた達成感を得て，次の活動へとつなげる(S-2)

ARCSモデル	注意(Attention)	自信(Confidence)
	A-1 知覚的喚起 (Perceptual Arousal) A-2 探究心の喚起 (Inquiary Arousal) A-3 変化性 (Variability)	C-1 学習要求 (Learning Requirement) C-2 成功の機会 (Success Opportunities) C-3 コントロールの個人化 (Personal Control)
	関連性(Relevance)	満足感(Satisfaction)
	R-1 親しみやすさ(Familiarity) R-2 目的指向性 (Goal Orientation) R-3 動機との一致 (Motive Matching)	S-1 自然な結果 (Natural Consequences) S-2 肯定的な結果 (Positive Consequences) S-3 公平さ(Equity)

教材２　研修使用教材の例

教材の使用方法

●　教材 2-1　学習項目シート　p.15

本教材は、目標設定と自己評価のために用います。研修の目標は「資質・能力」[1]の向上ですが、その目標を研修参加者に明示するため、本シートを作成しました。「資質・能力」の各項目の表現をより易しく親しみやすいキーワードに書き換えました。そして、参加者にとって違いが伝わりにくい表現については、統合しました。研修の開始時に、本研修の目標を示すために使用し、終了時には各項目についての自身の捉え方やその変化を、自己評価してもらうために使用します。

シート内、ハートの中にある項目は「資質・能力」の「態度」に該当するものです。「資質・能力」のすべての項目はこれを基盤とするものです。人が手に持つ円の中にある項目は「技術」に該当します。「技術」も「態度」あってこそのものです。そして、人の周りに散りばめられている項目は「知識」です。「態度」を育むためには「知識」も大切なものと考えられます。また、「資質・能力」に示されている項目以外に、2018 年度の研修実施の中で参加者のふりかえりから多く上がっていた「個の文化への視点」と本研修の目指すところである「住民相互の協力による地域づくり」を追加しました。

研修内では、本シートを初回に配布するほか、壁一面に項目を貼り出しておき、関心がある項目にシールを貼りました。評価の際は、このシートをもとに作成したカード（教材 2-2）を使用しました。

●　教材 2-2　学習項目カード　p.16

本教材は教材 2-1 のシートに書かれた学習項目をカード一枚ごとにしたものです。カードに書いてあるマークは、それぞれ「資質・能力」の「知識」「技術」「態度」を表しています。

研修内では、このカードを最終回に使用しました。この研修で学んだことは何か、大切だと思うことは何か、カードを使って自らの学びをふりかえり、グループ単位で研修をふりかえりました。

●　教材 2-3　ふりかえりシート p.18

本教材は、研修参加者自身が学習目標を意識化し、自身の学びを評価できるよう、方法を検討し、作成したものです。

本ふりかえりシートは２段階の構成になっています。ふりかえりを記入する際、いきなり文章を書くよりもまず評価項目のスケールを用いてその回の内容がどうだったか大雑把な評価をすることから、ふりかえりを始めてもらうという意図があります。

評価項目のスケールは、研修実施者が参加者の理解度を測るものではなく、参加者自身が自分にとって研修内容がどうであったかを評価するものです。また、本研修のユーザーとしての参加者に、商品としての研修を評価してもら

---

[1] 文化庁審議会国語分科会「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版」,p.34 表 11「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」

うものでもあります。

表面、「気づいたこと、感じたこと」「よくわからなかったこと、疑問点など」は研修の内容について参加者が感じたことや疑問を言語化するため、そして研修実施者とのインタラクションのためのものです。

裏面の「本日のあなたのキーワード」はその回の内容について、自分にとって「キーワード」だと感じたことを表してもらいました。同じ研修に参加しても、人によって心に残るポイントは違います。自分の心に残ったポイントはなんだろうと考えることが、ふりかえりとなります。

また、「次回までの自分への宿題」は、その回の学びを受けて実際にアクションを起こすための第一歩を自分自身で決めるためのものです。本研修ではただ受動的に講師の話を「聞く」だけではなく、同じ参加者同士との対話や体験を通して学ぶこと、そして学んだことを自らの行動に移すことを重視しました。この「自分への宿題」もその日に学んだこと・感じたことの中から、次回の研修までにすることを「自らが決め、行動すること」に意味があります。これは、「日本語学習者の自律的な学びをサポートする」ために自律的な学びを学習支援者が経験する仕掛けともなっています。

裏面下半分の「自分で決めたうちのできたこと」「やってみて思ったこと、感じたこと」は、上記の宿題を書いた次の回の冒頭で使用しました。自ら決めた宿題についてふりかえり、自己評価するとともに、個々のアクション結果を他者と共有する仕組みです。

● 教材 2-4　各回研修使用教材例　p.20

本教材は、研修各回で講師が使用した資料をもととして、作成されたものです。教材１「研修各回の流れ」と合わせて見ることで、講師が各回の目的達成のために、どのような意図で何をし、参加者に何を紹介したのかがわかるようになっています。

ですが、このまま研修各回で使用することを想定したものではありませんので、あくまでも、各回における活動や、事例紹介の例を示したものとしてお考えください。「なんだ、そのまま使えないのか」とお思いになる方もいらっしゃるかもしれませんが、一つの教材がそのまま各地で使われるようになることは、私たちの意図するところではありません。各地で各講師が使う教材や紹介する事例は、「その時、その場所だからこそ」「その講師だからこそ」使うもの、伝えるものであることに意味があると考えるからです。

講師として該当回を担当しようとしたときに、自分だったらどのような活動をもってその回の目的を達成するか、どのような事例を紹介し参加者にどのように考えてもらうかを、考える際の参考としてお使いいただくための教材です。

2-1　学習項目シート

日本語学習支援と文化理解を学ぶ講座－多文化共生のまちづくりをめざして

－学習項目－

このシートは、この講座で考えること・学ぶことを項目化したものです。

多文化共生

外国人の来日の経緯や文化背景

日本語教室に関わる人や機関の役割

現在の日本における外国人に関わる問題

日本語学習支援者，日本語教育コーディネーター，日本語教師の役割

個の文化への視点

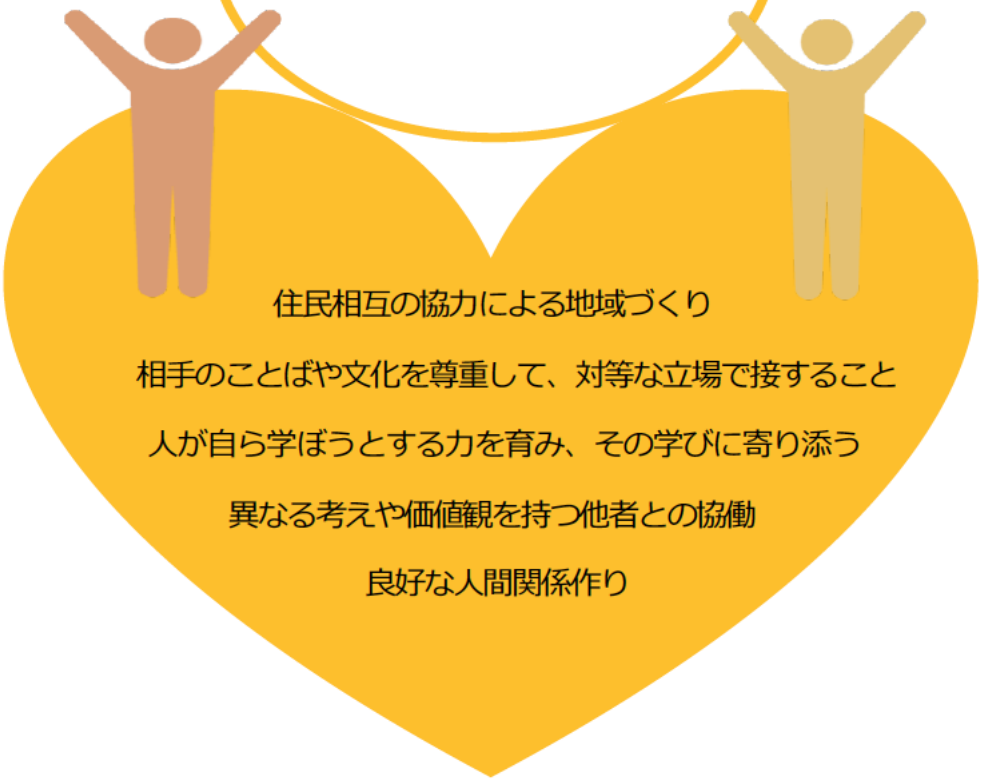
相手に合わせた日本語学習支援

港区の日本語学習の場

相手に合わせた話し方，聴き方

日本語の特徴

「わたしらしさ」を表現する手助け



2-2　学習項目カード

多文化共生	外国人の来日の経緯や 文化背景
日本語教室に関わる人や 機関の役割	現在の日本における 外国人に関わる問題
日本語学習支援者， 日本語教育コーディネーター， 日本語教師の役割	個の文化への視点
相手に合わせた 日本語学習支援	港区の日本語学習の場
日本語の特徴	相手に合わせた 話し方，聴き方

「わたしらしさ」を表現する手助け	相手のことばや文化を尊重して，対等な立場で接すること
人が自ら学ぼうとする力を育み，その学びに寄り添うこと	異なる考えや価値観を持つ他者との協働
良好な人間関係作り	住民相互の協力による地域づくり

2-3 ふりかえりシート

港区「日本語学習支援と文化理解を学ぶ講座」ふりかえりシート

第４回「相互理解を深めるための地域日本語教室の実践」　　受講番号＿＿＿＿＿＿

【１】講座の内容はいかがでしたか。

よかった　　よくなかった

５　４　３　２　１

（理由：　　）

【２】内容はわかりやすかったですか。

わかりやすかった　　わかりにくかった

５　４　３　２　１

（ 理由：　　）

●気づいたこと、感じたこと

●よくわからなかったこと、疑問に残ったこと

第３回　「市民活動としての学習支援の方法とコミュニケーションのための日本語の特徴」

受講番号＿＿＿＿＿

●本日のあなたのキーワード

「　　」

●次回までの自分への宿題

次の講座までの間にしてみることを決めましょう。

（例：今日の講座で知ったことを家族に話して感想をきく／日常生活の中で実践してみる
お風呂の中でもう一度テーマについて考えてみる　）

●第３回（１月１２日）に自分で決めた宿題のうち、できたこと

●やってみて思ったこと、感じたこと

（例：相手の反応が以前と変わった／意識すると意外にできるものだと思った　）

2-4 研修各回使用教材例

第１回　前半「学習者の背景理解」

港区「日本語学習と文化理解を学ぶ講座」2019 第1回 資料3

日本語学習支援と文化理解を学ぶ講座
ー多文化共生の地域づくりをめざしてー

第1回　2019.9.28

基本的な視点

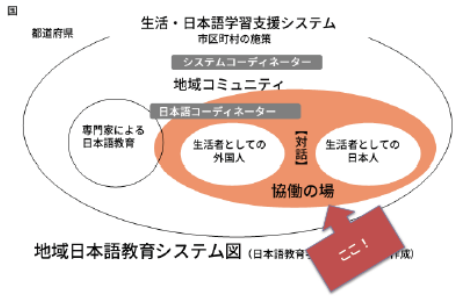
1. 人に対する価値観
   – 人は基本的に善なるもので，自ら学ぶ力がある
2. 民主的な価値観
   – 物事はできるだけみんなで決める
3. 当事者中心の価値観
   – 私たち一人一人が当事者で主体である
4. 社会から活動を考える視点
   – 地域の活動は究極的には社会のためである

研修の目的

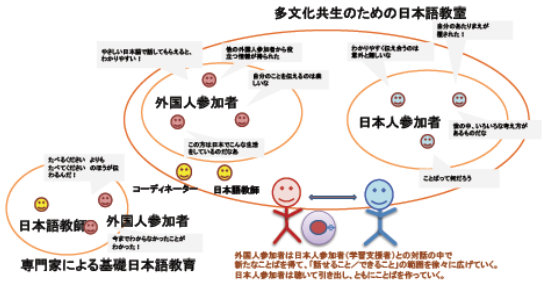
この講座では、日本語学習支援や文化理解を深める方法を学ぶことで、地域に住む外国人との交流やコミュニケーションについて考えます。

プログラム

1	学習者の背景理解 文化とは、多文化とは、多文化共生とは
2	相互理解と学習支援のためのコミュニケーションの基礎
3	市民活動としての学習支援の方法と コミュニケーションのための日本語の特徴
4	相互理解を深めるための地域日本語教室の実践
5	コミュニケーション・相互理解・日本語学習支援と「多文化共生の地域づくり」

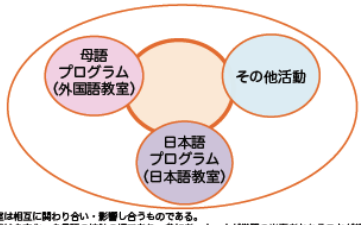


地域日本語教育システム図（日本語教育



地域における日本語教室の位置付け連関図

地域多言語・多文化教室



・それぞれの教室は相互に関わり合い・影響し合うものである。
・それぞれの教室は多文化・多言語の接触の場であり、参加者一人一人が学習の当事者となることが想定される

学習者の背景理解クイズ

- 来日外国人数
- 在留外国人数
- 在留資格の種類
- 日本語学習者数など

では　港区の状況は？

資料をもとに解説＋3つの問い
問1：外国人の増加傾向の詳細について
問2：外国籍住民の意識の詳細について
問3：課題と解決について
→区はどういう地域を作りどんな面で住民の社会参画を目指そうとしているのか

日本語教室の「意義」

- 社会での居場所
- 交流を通した相互理解
- 主体的な地域参加，地域づくり
- 日本語使用の機会（教育じゃないよ）

文化理解，文化づくりとそれを進めるためのコミュニケーション

2018～2019年に出版された
外国人労働者に関する書籍類の一部紹介

なぜ今，世間で注目？

少子化による人手不足
　→政策の推進と転換
1. 「高度外国人材」のさらなる受け入れ
2. 「労働者」の受け入れ
   - 「特定技能」という在留資格の新設
   - 「移民」への接続

外国人受け入れ政策の変遷

- 80年代半ば～
  - 「留学生10万人計画」
- 90年代～
  - 高度人材の受け入れ
- 2000年代～
  - 高度人材の留め置き
- 2019年～
  - 実質的な労働者受け入れの拡大

制度と意識

- 入管法改正（特定技能，特定活動４６号）
- 外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策
- 日本語教育の推進に関する法律

→制度面については整備が（ちょっとだけ）進みつつある

- じゃあ，共生社会を共に創る人々の意識は？

2019 年 9 月 28 日

文化とは、多文化とは、多文化共生とは

山西優二

１．はじめに

　ことばと文化

　日本語のもつ文化性

２．文化とは

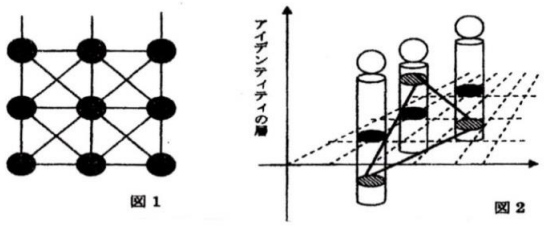
＊「集団によって共有されている生活様式・行動様式・価値などの一連のもの」（一般）

＊「文化を英語で言う coping system 対処手段、つまり問題解決のための一連の方法論というふうに捉えるべきではないかと考えています」「文化は、人間社会を取り囲む様々な問題に対して、伝え、採用し、あるいは新たに創造する解決策の全体である」（ベルギーの社会学者、ティエリ・ヴェルヘルスト）

＊「文化は博物館や美術館に展示するためにつくり出されたものではなく、また教育の対象、理解の対象となるためにつくり出されてきたものでもない。まさに文化は生活の中で生きており、また自然的社会的歴史的関係の変化の中で、変容していく動的なものである」（山西）

３．「人の間」「人の中」にある多文化

＜「人の間」「人の中」にある多文化＞



『多文化共生―人の間に　人の中に―』（2006 年度早稲田大学第二文学部山西ゼミ報告書、2007 年 1 月）

４．文化を取り巻く状況

（1）社会的には、国際化・グルーバル化の進展により、「文化的多様化」「文化的均質化」「文化的緊張化」といった文化の動的な状況が急速に多面性をもって存在するようになっている。そんな中にあって、平和・人権・持続可能性を希求する国際的な動きは「より普遍的な文化づくり」への動きと読み解くことができる。

＜文化の多様性への注視の国際的動向＞

＊「21 世紀の克服すべき重要課題として主だった７つの緊張」（ユネスコ 21 世紀教育国際委員会報告書『学習：秘められた宝』1996 年）・・・「グローバルなものとローカルなものとの緊張」「普遍的なものと個別的なものとの緊張」「伝統性と現代性との緊張」「長期的なものと短期的なものとの緊張」「競争原理の必要と機会均等の配慮との緊張」「知識の無限の発達と人間の同化能力との緊張」「精神的なものと物質的なものとの緊張」

＊国連総会で「平和の文化に関する宣言」（1999 年）

「平和の文化国際年」（2000 年）

＊「文化の多様性に関するユネスコ世界宣言」（2001 年）

＊「世界の子どもたちのための平和と非暴力の文化の 10 年」（2001 年から 2010 年）

＊「公正の文化づくり」・・・「持続可能な開発」「持続可能な開発のための教育」

（2）個々人のレベルでは、複数の文化にまたがって生きる人々が急増し、人の中の文化の多様性・多層性が活性化される中にあって、個々の文化的アイデンティティの形成の過程が多様かつ流動的になっている。

⇒文化が、社会（人の間）そして個人（人の中）のレベルで、「多様化」「均質化」「緊張化」「普遍化」している状況が生じていることを読み取り、その状況に対応するための文化への動的なアプローチが必要とされている。

５．多文化共生の捉え方

＊「本研究会においては、地域における多文化共生を『国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと』と定義し、その推進について検討を行った。」

（『多文化共生に関する研究会報告書～地域における多文化共生の推進に向けて～』（多文化共生に関する研究会 2006）

＊動的な文化観に立つと、多文化共生も「現在の社会において、『人の間』に『人の中』に、文化間の対立・緊張関係が顕在化する中にあって、それぞれの人間が、課題に即して、その様相や原因を読み解き、より公正で共生可能な文化の表現・選択・創造に参加している動的な状態」として捉えることができる。（山西）

６．ふりかえり・質疑

以上

＜資料＞

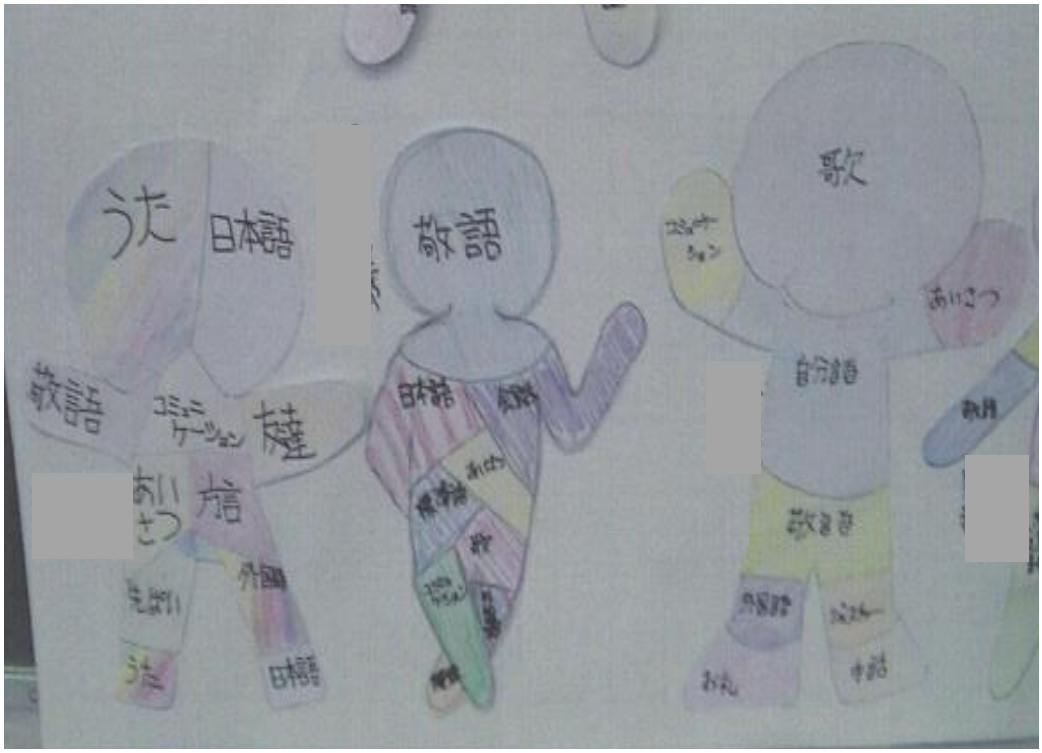
6 年生「ことばって何6 ろう？」「発信しよう！大切にしたいことば」

（2012 年度中野区立新井小学校 6 年生実践□秦さやか教諭）

まず□児童のもつことばのイメージを広げるために□ことばに関するイメージマップをかいた。「コミュニケーション」・「人とのふれあい」・「自分の気持ちを伝えるもの」・「怒り□喜び」・「楽しい□ワクワクする」・「時に他人を傷つけるもの」・「優しさ」・「プレゼント」・「手紙」・「書き言葉」・「昔の言葉」・「方言」・「敬語」・「色々な種類があるもの」□また「アイコンタクト」や「表情」なども「ことば」としている。

次に□自分にとって関わりある場や具体的な相手を想像し□そこで使われることばを図（自分ことばマップ）にした。それをもとに□自分が今後特に大切にしていきたいと思うことばベスト 8 を選び□人型のカードに書きこむ。児童自身の中にも複数の言語や「ことば」が内在することを視覚化させるためである。カードには大切にしたい「ことば」として□アイコンタクトや歌□ジェスチャーなども書き込まれていた。ある児童は□方言や外国語などを虹色に塗ることでその多様性を表現した（写真２）。

写真２　大切にしたい　とば人型カード



第２回　「相互理解のためのコミュニケーションの基礎」　前半「やさしい日本語」

港区「日本語学習支援と文化理解を学ぶ講座」第２回　資料１

第2回

相互理解と学習支援のためのコミュニケーションの基礎

「やさしい日本語」

横浜国立大学国際戦略推進機構非常勤講師

西山　陽子

自分の話し方について

✓話すはやさ

✓明瞭さ（はっきり？　ボソボソ？）

✓丁寧さ

✓話の長さ（短く簡潔？　長く？）

✓使うことば（難しいことば多め？）

✓声の大きさ

✓アイコンタクト

やさしい日本語

相手の理解に合わせて、

どう話したら伝わるか考えながら、

相手にために調整して使う日本語。

全ての人にわかりやすい日本語のこと。

災害時に情報を提供

取り組み内容紹介

「やさしい日本語」が外国人被災者の命を救います 発行日 2016年 2月18日

弘前大学人文学部社会言語学研究室 減災のための「やさしい日本語」研究会

http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/ejpamphlet.pdf（現在はHP閉鎖）

日常での情報提供やコミュニケーション

取り組み内容紹介

神奈川県横浜市
2019年「広報よこはま」やさしい日本語版について

https://www.city.yokohama.lg.jp/lang/residents/ej/about-us/other/koho/2020.html

大阪市生野区
「やさしい日本語からつながろう」やさしい日本語協力店地図について

http://www.city.osaka.lg.jp/ikuno/page/0000448076.html#map

観光に訪れる人のために

取り組み内容紹介

やさしい日本語ツーリズム研究会
柳川「やさしい日本語ツーリズム」ダイジェスト版
https://www.youtube.com/watch?v=HpwP3EW3Qo4

日本語学習の支援

教材紹介

『にほんごこれだけ！』
ココ出版　「にほんごこれだけ！」サポートサイト
http://cocopb.com/koredake/

＜原文＞
緊急地震速報です。先ほど東海地域で地震が発生しました。身の安全を確保し、速やかに最寄りの避難所へ移動して下さい。車を運転中の方は、徒歩での避難をお願いします。

＜やさしい日本語　言い換え文＞
地震です。東海地域で地震が起きました。安全なところに逃げてください。そのあと、近くの避難所へ行ってください。車を運転している人は、歩いて逃げてください。

出典：愛知県発行　「やさしい日本語」の手引き
https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/0000059054.html

0さんのスピーチを2回見ます。

日本語学習者（初級）のスピーチビデオを視聴

① 0さんの話の内容は？

② 0さんの話し方で気づいた点は？

やさしい日本語作りのルール

＜単語レベル＞

難しいことばをやさしいことばに変える。

✓ 熟語・カタカナ語・敬語はなるべく使わない。

✓ 擬音語・擬態語はなるべく使わない。

✓ 抽象的なことばは、具体例を示す。

✓ 専門用語　→　日常的に使うことば
＊ただし、覚えてほしいことばはそのまま使う。

＜文レベル＞

わかりやすい、簡単な文に変える。

✓ 「だれが」「どうする」をはっきり示す。
（主語、述語）

✓ 文末に「　～です。」「　～ます。」を使う。

✓ 一つの文をなるべく短くする。

✓ 一つの文で一つの情報を伝える。

✓ あいまいな表現を使わない。

✓ 余計な情報を足さない。

＜文章レベル＞

情報を取捨選択し、必要な情報に絞る。

✓ 大切なこと、伝えたいことは前に持ってくる。

✓ 伝えたいことを理解してもらうため、必要に応じて補足情報を加える。

＜話し方＞

ゆっくり、はっきり、でも不自然にならない。

大切なこと

情報を伝える時、ただことばをやさしくするだけではなく、まず相手がそれについて何を知っていて、何を知らないかを考える必要があります。

「わからないこと」はことばだけではなく、その背景知識の場合もあります。

情報提供

●災害時の緊急対応
●公文書などをわかりやすく
（地域のすべての人のため）
→　**ある一程のやさしさ**

コミュニケーション

●地域の共通言語として
（地域のすべての人のため）
→相手に合わせて調整

紹介内容
地域情報から考えるやさしい日本語

●港区　防災情報メール紹介

台風１９号についての防災情報メール

やさしい日本語で伝えるには？

紹介内容

台風１９号についての防災情報メール文

地域情報から考えるやさしい日本語

●港区 Minato information board(Facebook)

台風１９号についてのやさしい日本語でのお知らせ文

やってみましょう！

今日は2019年10月11日です。

近所の0さんは台風への備えは大丈夫でしょうか？

あなただったら台風の備えについて、0さんに
どう伝えますか。

まず、何から話しますか？　何を伝えますか？

まとめ

- 「やさしい日本語」に正解はありません。
  何をどう伝えるか、目の前にいる相手に合わせて、
  ことばを言い換えたり、絵や写真を使ったり、
  あれこれ工夫してみましょう。
- 「やさしい日本語」は実際使ってみることで、どんどん
  上手になります。
  相手を知ろうという気持ち、伝えようという工夫で
  楽しみながら「やさしい日本語」を使っていきましょう。

技術　＜　マインド

第２回　「相互理解のためのコミュニケーションの基礎」　後半「聴く・待つ」

港区「学習支援と文化理解を学ぶ講座」　第2回　資料４

第2回
相互理解と学習支援のためのコミュニケーションの基礎

「聴く」と「待つ」

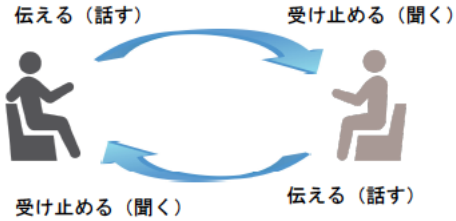
港区日本語教育コーディネーター　萬浪　絵理

交流する人同士の関係

さまざまな関係性

2

コミュニケーションの要素



3

「ことばの壁」をこえた文化理解のための コミュニケーション

①わかりやすさへの配慮・・やさしい日本語

②かかる時間への配慮・・待つ

③文化・価値観の理解・・・聴く

4

３つの　きき方

Q.　「最近、何か困っていることはありますか？」

1
2
3

5

日本語学習支援と文化理解のための、「聴く」と「待つ」の実践

・自分の発言を減らして「聴く」。沈黙を恐れない。

・話を先取りして本人の代わりに言ってしまわず、「待つ」。最後まで「聴く」。

・ことばが足りない部分をすぐに補完してしまわず、「待つ」。

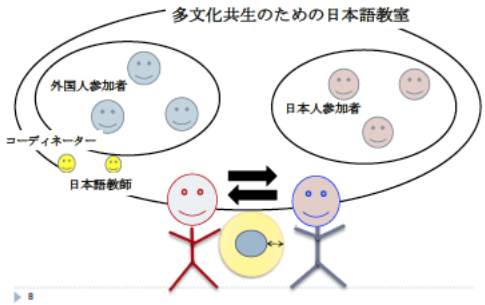
・単語が通じないときはすぐに翻訳してしまわずに、やさしい日本語で言い、相手が想像するのを「待つ」。

6

共生とコミュニケーションについて考えるための図

7

日本語学習支援と文化理解の両立をめざす



8

まとめ

・「やさしい日本語」で伝える。

・「聴く・待つ」姿勢で受け止める。

・双方向のコミュニケーションで文化理解を図る。

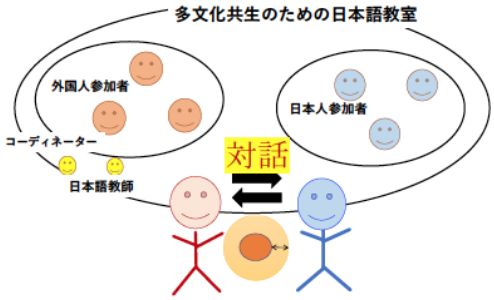
・そのプロセスが日本語学習支援になる。

9

第３回
市民活動としての学習支援の方法　と
コミュニケーションのための日本語の特徴

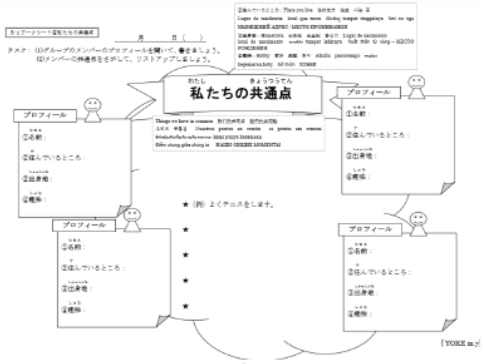
横浜国立大学非常勤講師、明治学院大学非常勤講他
矢部　まゆみ

日本語学習支援と文化理解の両立をめざす



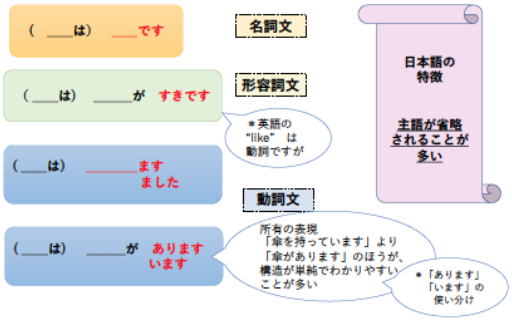
アクティビティ「共通点さがし」

- 活動方法説明
- 発表方法説明・発表
- 活動の効果について



『ＹＯＫＥ日本語教室教材例集』　p.18より

共通点さがしで　使いやすい　やさしい表現



対話とは：

バフチン（1963）
「対話的交流こそ、言語の真の生活圏なのだ」

→　対話は、話し手と聴き手の２つの「声」が出会い、互いに活性化しあう交通の過程

フレイレ（1970）：
「対話とは、世界を命名するための、世界によって媒介される人間と人間の出会いである」

→人間が主体として世界（社会）と向き合い、自身を世界（社会）に意味づけ、世界（社会）を変革していく

対話とは

●声を発する
●他者の声と向き合う
●新たな考えや行動を生み出す

＜対話＞の中で、
人間同士が向き合う、
互いの視点を出し合う、
共感したり視点の違いを認識したりする、
意味づけをする、
新しいものを作り出していく

矢部まゆみ（2005）「対話教育としての日本語教育についての考察」『リテラシーズ1』
くろしお出版　http://www.literacies.9640.jp/vol01.html

地域日本語活動の中での対話

・相手の＜心の声＞に耳を傾ける
　→　「思い」、ニーズや状況を捉える

・相手が＜声＞を発することができるように寄り添う
　・・・その人の＜声＞を聴き、形にする手伝いをする
　・・・「美しい日本語」「正しい日本語」を一方的に
　　押し付けたり、誤りを訂正するのではなく、
　　「一緒にことばをみつける」

・気づき、共感、理解

・相互に学び合う、新しいものを生み出す

・対話を通して、
　共に学び、共に考え、課題を解決していく
　共に社会をつくっていく

地域日本語活動の中での対話

であう
しりあう
つながる
まなびあう
わかりあう
ささえあう

「共通点さがし」をやってみて・・・

Q.
みなさんの教室の人たちと、このアクティビティを
やってみることができそうですか。
どんなときやるとよいでしょうか。

Q.
日本語を学び始めたばかりの人、使えることばが限られている人と、このアクティビティをするときには、
どのような工夫が必要でしょうか。

写真
活動の様子紹介

写真
活動の様子紹介

●事例紹介

横浜市国際交流協会（YOKE)のコミュニケーション・ワークショップ「おにぎり交流会」での「共通点さがし」実施例

紹介資料

使うと便利：　職業イラスト

神奈川県立国際言語文化アカデミア
「やさしい日本語でつながるコミュニケーション・シート」

紹介資料

使うと便利：　趣味イラスト①

神奈川県立国際言語文化アカデミア
「やさしい日本語でつながるコミュニケーション・シート」

紹介資料

使うと便利：　趣味イラスト②

神奈川県立国際言語文化アカデミア
「やさしい日本語でつながるコミュニケーション・シート」

対話のトピックについて

日々の活動のトピックの例

教材（リソース）と活動例

対話をしながら学習支援できる教材の例

	市販教材	ウエブ教材　（無料）
入門・初級前半～	『にほんご　これだけ！』 庵功雄監修，ココ出版，2010年	『YOKE日本語教室教材例集』 （公財）横浜市国際交流協会 https://www.yokeweb.com/nihongokyozai 『やさしい日本語でつながるコミュニケーション・シート』 神奈川県立国際言語文化アカデミア http://www.pref.kanagawa.jp/docs/ns2/eacademia/cs.html
初級後半～中級	『日本語　おしゃべりのたね』 西口光一監修，ｽﾘｰｴｰﾈｯﾄﾜｰｸ，2006年 『にほんご宝船』 春原憲一郎監修，アスク出版，2005年 『こどもにほんご宝島』 春原憲一郎・谷啓子監修，アスク出版，2009年	『つながる日本語』 神奈川県立国際言語文化アカデミア http://www.pref.kanagawa.jp/docs/ns2/cnt/f440039/index.html#tsunagaru 『「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的カリキュラム案　教材例集』 文化庁　文化審議会国語分科会 http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/nihongo_curriculum/index_3.html

教材と活動例：『ＹＯＫＥ日本語教室教材例集』どうぞよろしく

どんな使い方ができるでしょう？

20

紹介資料

● 使うと便利：　教室までイラスト

神奈川県立国際言語文化アカデミア
「やさしい日本語でつながるコミュニケーション・シート」

21

紹介資料

● 活動5 風邪を引いたら, p.32

ことば・表現１一体の部位や内臓などの名称, 内科問診票 , pp.155-156

『「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案　教材例集』文化庁国語課

● わたしの一日

『ＹＯＫＥ日本語教室教材例集』

22

対話の進め方

23

1．ひらいた質問／とじた質問

2．大きな質問／小刻み質問
（個人化、具体化）

3．話の広げ方・深め方

＊配布資料参照

24

実際にやってみましょう

「趣味（好きなこと）」をトピックにして、どんな対話ができそうですか

どんなふうに対話をすすめるとよさそうですか

日本語教室で、いつも自分が一緒に勉強している相手の人（または先週のビデオのＯさん）をイメージして、考えてみてください

25

まとめ

- 市民活動としての日本語学習支援の核となるのは「対話」
- 対話を通して相互理解・文化理解が深まり、ともに学び合うことができる。そしてそれが、ともに社会をつくっていく出発点となる。
- 対話を活性化するアクティビティを考えよう（「共通点さがし」もひとつのきっかけになる）。
- さまざまな教材（リソース）が、ネットからも入手可能。

26

第４回　「相互理解を深めるための地域日本語教室の実践」

日本語学習支援と文化理解を学ぶ講座
ー多文化共生の地域づくりをめざしてー　第4回
2019年１１月９日(土)

相互理解を深めるための
地域日本語教室の実践

社会福祉法人さぽうと２１
学習支援室コーディネーター
矢崎　理恵

【今日の目標】

1　実際の教室活動の実践を知り、自身の日本語学習支援のかたちについて具体的なイメージをもてるようになる

2　多くの人が集まる「学びの場」だからこそ可能な活動について知り、考えてみる

3　これまでの講座の学びの蓄積を総動員して、活動を実践し、「相互理解を深めるための日本語学習支援」について理解を深める

Copyright © 2019 Support21 Social Welfare Foundation, All rights reserved.

【今日の流れ】

1　さぽうと２１の活動実践から
1-1 「さぽうと２１」について
1-2 「教室」の方針や考え方・いくつかの取組の紹介
1-3 日本語学習支援の実践例

2　日本語学習活動に挑戦！　※14:30～
2-1 アイスブレーキングをかねて
2-2 一文字書道

3　振り返り

Copyright © 2019 Support21 Social Welfare Foundation, All rights reserved.

さぽうと２１の活動実践から

1-1
「さぽうと２１」について

団体の紹介
・教室スタイル
・参加者構成
・活動の流れなど

さぽうと２１とは

1979年、「インドシナ難民を助ける会」が設立される
以来、「難民」等、日本に定住する外国出身者を、
主に教育の面から支援する活動を続けている

学習支援室事業 ／ Learning Program

学習支援室事業 ／ Learning Program

■学習支援室は？
- 安全・安心が確保された学びの場
- 急がず焦らず、近からず遠からずの距離で、いつもそこにある学びの場
- 「否定されない」「否定しない」学びの場
- 「何でもあり」的学びの場
  パソコン、キーボード、簿記、ギター、合気道、編み物etc
- 曜日限定の「ご近所さん」的学びの場

さぽうと２１の活動実践から

1-2
「教室」の方針や考え方
いくつかの取組の紹介

取り組み紹介

- 学習者インタビュー動画
- 「場」（教室の様子）の紹介動画

方　針　①

「日本語教室」「日本語教育」の形にとらわれない

参加者の求め、必要とすることを最優先

「ご近所さん」としてできることを考え、実行する

Copyright © 2019 Support21 Social Welfare Foundation, All rights reserved.

取り組み紹介

- 学習者の自己実現への道のり　事例紹介

  「ネイリストとして起業」

方　針　②

外国人参加者も、日本人参加者も、

「本領発揮」できる場を

さがしていく、つくっていく

Copyright © 2019 Support21 Social Welfare Foundation, All rights reserved.

取り組み紹介

- 参加者の得意分野を生かした活動

  事例紹介　「教室にあるカフェ」

取組からの気づき①

●人が集まることで・・・

○活動はより豊かで楽しいものになる

○「無理かなあ」⇒「できるかも」

○一つのアクション⇒次々に展開

Copyright © 2019 Support21 Social Welfare Foundation, All rights reserved.

取り組み紹介

● 課題解決の対応

事例　「（これまで参加していた）活動への疑問」

取組からの気づき②

●多民族多言語、日本社会での経験
⇒「柔軟な発想」「共生の知恵」
「問題解決のための術」

●「疑問」や「問題」
⇒前進のための大切なチャンス

●話し合い
⇒「納得しながら折り合いをつけていく」

Copyright © 2019 Support21 Social Welfare Foundation, All rights reserved.

さぽうと２１の活動実践から

１-３
いくつかの
日本語学習の実践例

日本語学習のための実践

【おすすめの活動】

（「おいしい！」だけじゃない）料理の会

川柳教室	生活マップ作り
動画作成	ラジオ(ドラマ)出演
スーパーへGO!	生活クイズ大会
街歩き	合唱コン

Copyright © 2019 Support21 Social Welfare Foundation, All rights reserved.

日本語学習のための実践　①

『街歩き』 いっしょに街を歩き回ってみましょう。

●ある日の目標

①＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ことができる

②＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ことができる

③＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ことができる

Copyright © 2019 Support21 Social Welfare Foundation, All rights reserved.

日本語学習のための実践　①

『街歩き』 いっしょに街を歩き回ってみましょう。

●今日の目標（希望を聞いて話し合って決定）

①希望の店まで行くことができる
行きたい場所が分かる、アプリで探せる、道がきける、
道の説明がわかる・・・

②希望の品物を買うことができる
希望の品物の売り場をみつけられる、場所がきける
モノのありなしが聞ける、成分等の確認ができる・・・

③店頭（アイスクリームショップ）で注文ができる
買いたいものが示せる／注文ができる・・・

Copyright © 2019 Support21 Social Welfare Foundation, All rights reserved.

学習支援者との協働演習

- アイスブレーキング

  実践　「共通点さがし」

- 日本語学習活動に挑戦

  実践　「一文字書道」

一文字書道

『来年の私の一文字＋ミニミニ作文』

♥ 完成の過程で求められる日本語のスキル
「かく」「はなす」「きく」「よむ」＋**「考える」「思う」**

♥ 目標＝「**見えやすく、分かりやすい**」
その実施過程でより本質的な狙いである
「人と人とのやりとり」「相互理解」が進む

Copyright © 2019 Support21 Social Welfare Foundation, All rights reserved.

【今日の目標】

1　実際の教室活動の実践を知り、自身の日本語学習支援のかたちについて具体的なイメージをもてるようになる

2　多くの人が集まる「学びの場」だからこそ可能な活動について知り、考えてみる

3　これまでの講座の学びの蓄積を総動員して、活動を実践し、「相互理解を深めるための日本語学習支援」について理解を深める

Copyright © 2019 Support21 Social Welfare Foundation, All rights reserved.

教室の活動を考える

「地域日本語教室」で活動していくうえで、

あなたが「いつも心に留めておきたいこと」

はどんなことですか。

Copyright © 2018 Support21 Social Welfare Foundation, All rights reserved.

第５回　「コミュニケーション・相互理解・日本語学習支援と「多文化共生の地域づくり」」

港区日本語学習支援と文化理解を学ぶ講座ー多文化共生の地域づくりをめざして

第5回
コミュニケーション・相互理解・日本語学習支援と「多文化共生の地域づくり」

武蔵野大学　神吉宇一

今日の内容

- 教室見学のシェア（20分）
- 教室のスタイルについて（10分）
- 全体ふりかえり（60分）
- 休憩（10分）
- グループワーク（60分）
- 本日のふりかえり（10分）

2019/11/09　Copyright©Uichi Kamiyoshi 2019.

教室見学シェア

- どんな教室を見てきたか
- そこでは何が行われていたか（支援者・学習者）
- その活動を見てみなさんは何を感じたか（共感・違和感・ほか）
- なぜそのように感じたのか，なぜ共感できたのか/違和感を感じたのか

2019/11/09　Copyright©Uichi Kamiyoshi 2019.

教室のスタイルについて

学校型と地域型

- 存在意義
- 学習目標
- 学習時間数
- 学習内容
- 支援者の存在

学校型・地域型を超えて

- 日本語使用環境がある中での教室の役割

2019/11/09　Copyright©Uichi Kamiyoshi 2019.

全体ふりかえり

1. 質問への回答
2. 個人のふりかえり
3. 学んだことの再確認

2019/11/09　Copyright©Uichi Kamiyoshi 2019.

第１～4回までの質問への回答

2019/11/09　Copyright©Uichi Kamiyoshi 2019.

「学習項目カード」を使用した個人のふりかえり

2019/11/09 Copyright©Ichi Kamiyoshi 2019.

学んだことの再確認

- 学んだことの再確認学習項目カードを「重要な順」に上から5つ選んで並べてみる
- グループで意見が合わない場合，合意形成が必要

2019/11/09 Copyright©Ichi Kamiyoshi 2019.

グループワーク

- 講座を通して学んだことを踏まえ，学習支援者としての私たちにできる活動案について考える
- グループごと作成したものをシェア

2019/11/09 Copyright©Ichi Kamiyoshi 2019.

本日のふりかえり

1. 気づいたこと，感じたこと，よくわからなかったこと，疑問に思ったこと
2. 全体を通しての学び

2019/11/09 Copyright©Ichi Kamiyoshi 2019.

文化庁委託日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業
CINGA 日本語学習支援者に対する研修カリキュラム開発事業
教材

2020 年 3 月 発行
発行　特定非営利活動法人 国際活動市民中心
CINGA (Citizen's Network for Global Activities)
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 2-3 神田古書センタービル 6F
TEL　03-6261-6225
FAX　03-6261-6280（共有）
E-mail　info@cinga.or.jp
URL　http://www.cinga.or.jp/

編集　西山 陽子、萬浪 絵理